BCCWJを利用した反復相・反復強意相の機能動詞「繰り返す」「積む」「重ねる」の異同
―名詞の共起状況を手掛かりに―

中　溝　朋　子
坂　井　美恵子
金　森　由　美

要旨

本稿では，「繰り返す」「積む」「重ねる」について機能動詞（村木 1991）としての意味の異同を明らかにし，日本語教育への応用について検討する。「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」で検索した共起名詞の特徴を基に，瀬戸（2005，2007）の「中心義」の概念を用いて，各動詞がどのような中心義を持ち，中心義から機能動詞の意味にどのように連続性を持つかを分析することによって，機能動詞としての意味の違いを明らかにする。最後に日本語教育においてこれらの機能動詞の意味の違いを導入する例として試案を提案する。

キーワード

機能動詞，コーパス，BCCWJ，共起，中心義，反復相

1. はじめに

本稿で扱う「積む」，「重ねる」，および「繰り返す」が類義語として扱われる場合は以下のような場合である。

(a) 机の上に書類を積む / 重ねる
（書類：具体名詞）
(b) 大会前に練習を積む / 重ねる / 繰り返す
（練習：動作名詞）

(a) のように具体名詞と共起し，二つ以上のものを上に載せる場合には「積む」と「重ねる」が，(b) のように動作名詞と共起し，その動作が反復されることを表わす場合には「繰り返す」を含めた三動詞が類義と考えられ，その使い分けは日本語学習者にとっては難しいと考えられる。また，これまでの辞書や類義語辞典の記述，類義語研究では，(a) のような具体名詞と共起する実質動詞は多くの研究がなされているが，(b) のような動作名詞と共起するいわゆる機能的意味の記述や研究は，まだ数が少ないと思われる。

本稿では，この従来あまり取り上げられてこなかった三動詞の機能的意味の異同を明らかにすることを目的とし，三動詞について①コーパスを用いて実際の使用例，特に名詞との共起状況を調査し，②それらの名詞を具体名詞，抽象名詞，動作名詞に分類した上で，③具体名詞との共起の中からその動詞の中心義となる意味を特定し，④その中心義と機能動詞にどのような意味が共有され，その意味はどのように連続しているかを検討することで三動詞の異同を明らかにする。そしてその結果を日本語教育に応用することを目的とする。

2. 先行研究と本稿の立場

2.1「積む」と「重ねる」について
―国研（1972），長嶋（1979）―

両動詞について長嶋（1979）では，一冊の本なら積めるが一枚の新聞紙では積めないことなどを挙げ，「積む」ものは「嵩のある個物」で「積む」は「それらが平面上に位置させたいくつかの嵩のある物の上に次々と対象物を位置させる」こととしている（長嶋1979:176）。一方「重ねる」は，カルテ・羽織は重ねられるが藁くずは重ねられないとし「＜平面を持つ，同じ形の二つ以上のもの＞を＜その全面が合致するように接触させる＞」としている（長嶋1979:177）。

また国研(1972)ではこれら両動詞は「２つ以上のものを１つの場所に置く」こととし，「積む」は「ある１つのものの上に，ほかのものをおくこと，この場合の＜上＞というのは，地面を基準にしてそれに垂直な方向をいう」とし，「重ねる」の＜上＞は『ポスターを重ねて貼る』のように人間が目でみとめやすい，表になっている面の方向」としている（国研 1972:261）。

本稿でも「積む」が（物理的に）上方向，「重ねる」が合致するように接触することなどは同様に考えるが，例えば「積む」では小石や積木のような必ずしも嵩があるとは言えない小さい物も可能なこと，「まつ毛にマスカラを重ねる」のように物理的に平面とは言い難く，個体と液体という性質も異なるものを「重ねる」ことも可能であることなどから，これらの説明が語の中核となるべき意味の説明として適切であるかどうかは検討の余地があると考える。またこれらの説明では，共通して同じ名詞が共起する例「書類を積む／重ねる」などの異同についても説明できない。このような点から，これら二動詞の意味の記述についてはさらに検討が必要と考える。

また，「重ねる」が動作名詞と共起する場合について，長嶋（1979）は比喩的用法として「三段跳の練習を何回も積む」が不適切で「重ねる」が可能な理由を「これはカサネルの，＜同じ形のもの＞と＜二つ以上＞という特徴の転用とみることができる」と説明している。「積む」については「ツムの比喩的表現では＜全体として嵩が大きく成る＞という特徴の転用が見られ」，「『積極的なプラスの効果』が暗示される」ため，「『トレーニング（練習・経験・信用）をツム』は，これらのものの嵩が全体として大きくなり，プラスの効果があることを意味する」として可能であるが，「三段跳び」のような場合は不適切であるとしている（長嶋1979:179）。

本稿でも具体名詞と共起した場合の意味と動作名詞と共起した場合の意味が（一部）共通の意味を有すると考える点や「積む」がプラス効果の蓄積の意味を持つと考える点は同様であるが，「練習／経験を重ねる」も可能なことなどから，動作名詞と共起した場合の意味についてもさらに詳細な検討が必要と考える。

2.2「機能動詞（村木 1991）」と「中心義（瀬戸2005，2007）」

村木（1991）は「書類」のような具体名詞と共起する場合の動詞を「実質動詞」，「練習」のような共起する（動作）名詞が動作の実質的な内容を表わし，動詞は文法的意味（「繰り返す」なら「反復」）を表わすような場合を「機能動詞」と呼ぶ。そしてこのような実質動詞と機能動詞の関係は，具体名詞と共起した実質動詞「背広をかける」から「言葉をかける」のような抽象名詞と共起する場合を経て，「攻撃をかける（＝始める）」という始動相のアスペクトといった文法的意味を表わす機能動詞が成立すると考える。

本稿でも村木（1991）と同様に実質動詞，機能動詞の用語を用い，両者は意味的に連続性を持つと考え，検討の対象として村木（1991）がアスペクトの機能動詞として挙げている反復相の「繰り返す」「重ねる」，反

復強意相の「積む」を取り上げる[1]。その際，実質動詞と機能動詞の関係については，以下の瀬戸（2005，2007）の「中心義」の考え方を用いる。

瀬戸（2005:101）は，多義語の意義[2]について「（多義語は）中心があってまとまっている」と考え，その中心となるものを「中心義」と呼んでいる。中心義とは「（ⅰ）文字通りの意義であり，（ⅱ）関連する他の意義を理解する上での前提となり，（ⅲ）具体性（身体性）が高く，（ⅳ）認知されやすく，（ⅴ）想起されやすい。また，（ⅵ）用法上の制約を受けにくい。それゆえ，（ⅶ）意義展開の起点（接点）となることがもっとも多い意義である。また，中心義は，おそらく，（ⅷ）言語習得の早い段階で獲得される意義であり，（ⅸ）使用頻度が高いことが多い。ただし，必ずしももっとも頻度が高い意義と一致するわけではない。現実には，派生的，比喩的な意義のほうが頻度が高いこともある。しかし，派生的，比喩的な意義は，あくまでも中心義との関連の中で理解されるべきである」（瀬戸2007:4）と述べている。

このように村木（1991）と瀬戸（2007）は多義語の複数の意味に関してより具体的な意味を起点とし意味間に連続性があるとする点は共通しているが，その連続の仕方については考え方が異なる。村木（1991）では，具体名詞と共起する場合を起点とし，抽象名詞と共起する場合の意味を通して機能動詞の意味が生ずると考えているが，瀬戸（2007）では中心義を意義の起点，意義の分割の基準をメタファー，メトニミー，シネクドキとし，これらが複数の意義間のネットワークを展開していると考える。本稿では中心義から機能動詞の意味に至る意味の分割の基準の特定は扱わず，各動詞の中心義と機能動詞としての意味の内容のみを検討の対象とする。中心義は具体名詞と共起した場合を起点とするが，どの要素が中心義に含まれるかその特定にあたっては，抽象名詞や動作名詞と共起する際の動詞の意味とどれだけ連続性があるかという点も考慮に入れる。

多義語の分析については，このように中心義を起点と考える方法のほか，複数の意味の中から文脈（主語，目的語など文となる要素）などの具体性を取り除いた抽象的なコアを中心に考える方法などがあり，後者については近年，複合動詞の分析で日本語教育でも応用されている（松田2001，田中2004，白石・松田2014）。しかし，意味の起点として抽象的なコアを考えるよりも中心義を用いた説明のほうが，実質動詞の意味から機能的意味が生じると考える村木(1991)の考え方とより親和性が高く，具体的な意味を考えた上で機能的な意味を考えられるため、学習者の既有知識と結びつけやすく理解しやすいのではないかと考えられるため，本稿では中心義を想定する方法で分析を行うこととする[3]。

3. 調査の対象と方法

本稿ではデータとして国研（2011）の『現代日本語書き言葉均衡コーパス（以下BCCWJ）』を用い，検索アプリケーション「中納言」を使って各動詞と共起する名詞の検索を行った。「中納言」の具体的な検索方法は「キー」に語彙素「を」，「前方：キーから1語目」に「品詞－中分類－普通名詞」，「後方：キーから3語目以内」に「語彙素」として各動詞を入力し，「を」の直前に共起する名詞を抽出した。次にこれらの名詞を日本語教師3名で具体名詞，抽象名詞，動作名詞に分類した。分類の基準は，抽象名詞には抽象概念のほか，助数詞など数の概念も含め，動作名詞には村木(1991)の基準，①スル動詞が可能な名詞，②動詞の連用形に加え，例えば「打撃」のように①②に該当しない場合でも語を構成する漢字が動詞の意味を表すなど名詞自体が動作を表わす場合も含めることと

表1「繰り返す」と共起する名詞（ダイス係数上位30語）[6]

順位	共起名詞	共起頻度	ダイス	順位	共起名詞	共起頻度	ダイス	順位	共起名詞	共起頻度	ダイス
1	★過ち	51	104	11	操作	29	41	21	テスト	17	25
2	動作	57	93	12	★言葉	92	39	22	練習	20	25
3	試行錯誤	43	87	13	再発	19	38	23	抗争	11	23
4	失敗	52	68	14	主張	31	36	24	嘔吐	11	23
5	入退院	31	67	15	自問自答	15	32	25	一進一退	10	22
6	呼吸	35	52	16	発言	22	31	26	瞬き	10	21
7	実験	29	48	17	衝突	17	31	27	増殖	11	21
8	作業	54	48	18	噴火	15	30	28	処理	25	21
9	増減	24	48	19	★パターン	19	30	29	攻撃	16	19
10	分裂	23	43	20	行為	35	29	30	死闘	9	19

した。最後に Microsoft の Excel を用いて各名詞と動詞の共起頻度を集計し，共起強度を示すダイス係数[4]を算出した。

また本稿では，語の意味の総和が全体の意味と一致しない（例えば「年輪」「重ねる」の各語の意味から「年輪を重ねる＝時間が経つ」にはならない）場合を慣用句とし，慣用句中の語は，語本来の意味を担ってはいないことから，分析の対象からは除外する[5]。

4. 共起する名詞の検索結果と分析

以下，三動詞と共起した名詞についてダイス係数順上位30語を示し，分析する。表中，☆は具体名詞，★は抽象名詞を示す，無印は動作名詞を示す。またダイス係数は，表中「ダイス」とし便宜上１万倍した数値で示す。

4.1 「繰り返す」

4.1.1 共起する名詞の特徴

まず，表１に「繰り返す」と共起した名詞をダイス係数順に示す。

「繰り返す」は動作の反復を表わす機能動詞であり，具体名詞との共起はなかった。これらの抽象名詞・動作名詞を意味別に分類すると，表２のようになる。「繰り返す」と共起する名詞は，意味的に「反復される内容」と「反復される内容への評価」に分類できる。抽象名詞は内容を表わす語では①「言葉，パターン」，評価を表わす語では②「過ち，悲劇（40 位）」などが共起する。動作名詞は，内容を表わす語には①目的を達成するための調査や言語活動「実験，テスト，主張」，②戦いや攻撃的な動作「衝突，抗争，攻撃」，③動きを抽象的に表わす「動作，作業，操作」，④自動詞や他動詞の無意志動詞な動作や変化を表わす「呼吸，分裂，再発」，⑤反意関係にある二つの動作や変化の反復，もしくは一連の動作や変化のサイクル「入退院，増減，循環」，動作に対する評価を表わす語

表2「繰り返す」と共起する名詞と意味分類

意味		抽象名詞例	動作名詞例と意味細分類
1	反復される内容	①言葉，パターン	①目的達成のための調査や言語活動：実験，テスト，主張 ②戦いや攻撃的な動作：衝突，抗争，攻撃 ③抽象的な動き：動作，作業，操作 ④自動詞や他動詞の無意志動詞で変化を表わす：呼吸，分裂，再発 ⑤反意関係の二動作・変化・一連のサイクル：入退院，増減，循環
2	反復される内容への評価	②過ち，悲劇（40 位）	⑥試行錯誤，失敗

では⑥「試行錯誤，失敗」などが共起していた。この中で抽象名詞①②と動作名詞の①②⑥では「重ねる」と互換性がある語もあるが，③④⑤の動きを抽象的に表わす語や動作や変化を描写する語は，「積む」「重ねる」ともに互換性が低い語が多かった。また評価を表わす語はすべてマイナス評価の語であった。

「繰り返す」は，始動相の「始める」，終結相の「終わる」と同様，文法的な意味のみを持つ機能動詞であり，具体名詞との共起はない。そのため中心義については，「積む」「重ねる」との比較の中で明らかにすることとする。

4.2 「積む」

4.2.1 共起する名詞の特徴

以下，表 3 に「積む」と共起した名詞をダイス係数順に示す。

表3「積む」と共起する名詞（ダイス係数上位30語）

順位	共起名詞	共起頻度	ダイス	順位	共起名詞	共起頻度	ダイス	順位	共起名詞	共起頻度	ダイス
1	経験	312	358	11	★善行	13	93	21	★実績	16	57
2	修行	45	215	12	訓練	38	83	22	☆燃料	16	52
3	研鑽	26	185	13	☆エンジン	26	68	23	体験	28	46
4	修業	29	182	14	☆煉瓦	12	67	24	☆大金	6	38
5	修練	26	178	15	☆石炭	13	65	25	修養	5	36
6	☆荷物	48	170	16	☆荷	10	64	26	鍛練	5	35
7	★キャリア	29	136	17	練習	30	63	27	☆ブロック	7	29
8	トレーニング	30	124	18	★功徳	9	63	28	★教養	6	29
9	★徳	16	97	19	☆石垣	10	60	29	☆物資	5	27
10	☆石	50	96	20	稽古	13	60	30	☆メモリ	6	26

「積む」と共起する具体名詞はすべて，重量がある（と想像される）「荷物，石，煉瓦」などであった。また抽象名詞は動作主の負担を伴う動作を反復した結果として蓄積される「キャリア，徳，実績」などで倫理的・能力的にプラス評価の語ばかりであった。動作名詞は「修行，トレーニング，訓練」など目標のために自らを向上させる意味で，肉体的負担が大きいものが多く共起していた。これらは「早く走るトレーニング」のように具体的に行う動作の場合もあるが，すべて「修行，研鑽」のように反復される具体的な動作をその性質や目的などの観点から活動の総称として表わす名詞であるという特徴を持っている。

4.2.2 「積む」の中心義の特定と他の語義との連続性

以上を考慮し，「積む」の中心義を検討する。「積む」が具体名詞と共起する場合は，「荷物」「石」「エンジン」「煉瓦」「エンジン」などであり，どれも一般的には運搬者に負担を与える程度の重量のあるものと考えられる。またこれらの「積む」方法については，①「煉瓦」「ブロック」のようにひとつのものの上に，同種のものを物理的に上方向に載せていく方法と，②「エンジン」「燃料」のように「（主に運搬のために）乗り物に載せる」場合が考えられ，②の場合は載せるものは一個の場合も複数個の場合もあり得る。①②の意味両方で共起する名詞も多く（「荷物」「石」「石炭」など），また乗り物の上で同種のものが複数個，上方向に載せられる場合のように①②両方の方法が同時に行われる場合もある。

また①の場合には，上方向に載せる物自体を表わす名詞（「煉瓦」「ブロック」）と，同種のものが複数個載せられてできた結果（産物）を表わす名詞（「石垣」「大金」）

など）の両方がある。②については，乗り物に載せる場合には，上位30位には見られなかったが，「車にかばんを積む」のように比較的軽いものを載せる場合でも使用可能と考えられる。そのため「PCにメモリを積む」といったごく軽いものを乗り物以外の機械に載せるという新しい用法と思われる例も観察できた。

中心義をこれら実質動詞①②のどちらに特定するかの検討にあたっては，どちらのほうがより抽象名詞や動作名詞と共起する場合の意味と連続性があるかという点を参考に考える。抽象名詞や動作名詞の特徴を考えると，すべて動作主の負担を伴う動作の反復，およびその蓄積の結果を表わすこと，反復・蓄積された結果は倫理的・能力的に上方向（向上・上昇）であることであり，実質動詞の①の意味のほうがより共通点があり，意味間の連続性を持つと考えられる。したがって「積む」では①の意味を中心義として扱うこととする[7]。

4.3 「重ねる」

4.3.1 共起する名詞の特徴

以下，表４に「重ねる」と共起した名詞をダイス係数順に示す。

表4「重ねる」と共起する名詞（ダイス係数上位30語）

順位	共起名詞	共起頻度	ダイス	順位	共起名詞	共起頻度	ダイス	順位	共起名詞	共起頻度	ダイス
1	努力	123	168	11	協議	33	60	21	☆年輪	11	48
2	☆唇	57	134	12	★齢	14	60	22	失敗	23	44
3	★年齢	88	120	13	工夫	24	55	23	犯行	12	44
4	★回数	35	106	14	錯誤	14	55	24	思索	10	42
5	苦労	41	92	15	デート	17	54	25	交渉	21	42
6	検討	73	83	16	逢瀬	12	54	26	得点	12	41
7	☆杯／盃	37	81	17	★版	28	51	27	経験	36	37
8	借金	24	70	18	折衝	12	51	28	★年月	10	37
9	練習	34	60	19	我慢	21	49	29	話し合い	11	37
10	議論	37	60	20	改良	18	49	30	対話／会合	11	37

「重ねる」のダイス係数30位までの具体名詞には「唇，杯，年輪」など慣用句を成す名詞ばかりであった。そのため30位以下も概観すると，「ロゴにポインタ，（まつ毛の）毛先のみにマスカラ」などが見られた。これらは重ねられる物同士が異種で，形状も重ねる方向性も共通点が見られない。ここから具体名詞の共通点は，重ねられる物同士の種類・形状・方向性ではなく，ロゴで示したいものをさらにポインタで示す，まつ毛の美しさをマスカラでさらに美しくするといった同じ機能や役割を持つものを，方向性を問わず一定方向に二つ以上反復して接触・密着させるという意味と考えられる。

また抽象名詞では「年齢，回数」など数を表わす名詞や，「版」など助数詞の使用も可能な名詞[8]が時間の経過や数の増加を表わす例も見られた。30位以内では抽象名詞は数に関する語のみであったため30位以下も調査し，これらを意味別に分類したものを表５に示す。

このように抽象名詞でも，重ねられるものは「音声（歌声に合成音），個別情報」のような同種のものも異種で形状が異なるものもある。しかし具体名詞と同様，すべて同じ機能・役割を持ち，重ねられる方向性も様々だが一定と考えられる。

動作名詞では①「努力，苦労，我慢」などの動作主の姿勢や心情，反復以前に比べ②反復によってプラス方向に向かう「検討，練習改良」や，③マイナス方向に向かう「借金，，

表5 「重ねる」と共起する抽象名詞と意味別分類

意味		抽象名詞例
1	時間の経過	年齢 / 年月
2	数の増加	版 / 回
3	イメージの同時想起	[その子に]自分 /[富士山の高さは比叡山の高さを]20 ばかり
4	音声の同時再生	[歌声に]合成音
5	情報の照合	[複数の]個別情報
6	場所(焦点)の一致	[鏡で光電池に]日光 /[カメラに]目線

＊[ ]内は用例を分かりやすくするための例

失敗，犯行」が共起していた。また「積む」とは共起しない言語活動「議論，協議，折衝」や，快楽的行為「デート，逢瀬」なども共起していた。

4.3.2 中心義の特定と他の語義との連続性

以上を考慮し，「重ねる」の中心義を検討する。「重ねる」と共起する具体名詞は，重ねられるものの種類・形状・方向性に共通点はないが，方向は問わず一定方向に，同じ機能・役割を持つものを反復して接触・密着させていた。このことから「重ねる」では，（プラス・マイナスなど）向かう方向は不問だが，何らかの目的に向かって一定方向に，同様の機能や役割を持つものを接触・密着させるという意味が中心義と考えられる。

抽象名詞は物理的な接触や密着は不可能であるが，同じ機能・役割を持つものが反復して継続，また同じ場所に一致させられるなどの点で，中心義の接触や密着と連続性があると考えられる。動作名詞も，反復される動作は同じ機能や役割を持ち，反復されることで効果や影響がより深化・進行する点が共通すると考えられる。

このように三動詞にはそれぞれ固有の中心義が存在すると考えられるが，一方で複数の動詞に共通して共起した名詞も存在する。以下，それらの具体例を検討し，それぞれの動詞がどのように中心義を共有しているかを検討する。

5 複数の動詞と共起可能な名詞

5.1 二つ以上の動詞と共起可能な名詞

ダイス係数上位30位以内で三動詞すべてと共起した名詞は「練習」のみであった。「繰り返す」と「重ねる」では「失敗，試行錯誤」の二語，「積む」と「重ねる」では「経験」の一語のみが共起していた。「繰り返す」と「積む」だけに共起した語は見られなかった。以下，BCCWJ の用例を用い，他の動詞との互換性などを考慮しながら，各動詞の異なる中心義がそれぞれどのように機能動詞の意味と共通点や連続性を持っているかを検討する。なお，各用例の後に BCCWJ のサンプルID番号を示す。例文中の下線と太字は筆者による。

5.2 「繰り返す」と「重ねる」に共起する名詞

5.2.1 「失敗」「試行錯誤」

はじめに「繰り返す」「重ねる」と共起する「失敗」「試行錯誤」について検討する。

[1] 反復の内容が同じか，機能・役割が同じか

(a) 不器用なので切り替えに時間がかかって，同じ**失敗**を**繰り返したり**して凹みました。
(OC04_00802)

(b) ・・・と思うのでここで焦るのが１番いけない！昨年の**失敗**を**繰り返さない**ように慎重にやっていくしかないですね。
(OY07_02309)

(c) ご飯の炊き方やみそ汁の作り方だって、掃除洗濯もきっと何度も何度も**失敗**を**重ね**

て作りあげたのが、そこの家庭じゃないでしょうか。 （PN3e_00024）

(d) 今季はフォーム改造など**試行錯誤**を**重ねて**岡田監督の信頼をかち取り，二十二試合に登板。 （PN5j_00021）

[1](a)(b) の「繰り返す」は「同じ失敗」「去年の失敗」のように特定の失敗を反復しているが，「重ねる」の(c)(d)では「ご飯の炊き方やみそ汁の作り方だって、掃除洗濯も何度も何度も」「フォーム改造など」といった表現から，「失敗」や「試行錯誤」している具体的内容は同じ内容ばかりではないと考えられる。このように両動詞は反復を表わしているが，「繰り返す」では同じ内容が反復される場合に使用され，「重なる」では内容が異なることもあり得るし、さらに同じ機能や役割を持つ動作を反復することで「（そこの家庭を）作り上げる」「信頼をかち取る」など一定方向に効果が進行することをも述べていると考えられる。

5.2.2 「言葉」

動作名詞「失敗」「試行錯誤」で見られた特徴は，[2] の抽象名詞「言葉」にも見られる。

[2] 反復の内容が同じか，機能・役割が同じか

(a) マリアはもう何十回となくいった同じ**言葉**を**くりかえし**抱擁した。 （LBe9_00153）

(b) ペトロは９節の**言葉**を**繰り返します**。 (0Y03_11893)

(c) 「理由はないの」楠は，その答えを知っていた気がした。「理由は，この国だからか」「はい」どう話を続けていいのか分からない。「それに私が日本人だって，よく分かったから」と天田原は**言葉**を**重ねた**。 (PM22_00040)

(d) しかし，ある感情を強く伝えたいときは，その場で２度ずつ，あえて同じ**言葉**を**重ねて**みる。 (PM41_00539)

「繰り返す」では [2](a)(b) のように文言が同じ言葉を複数回述べる例が大半であったが，「重ねる」では (c) の「それに」以下のような同じ発話意図を持つ，異なる言葉を述べる場合や，(d) のように同じ言葉を述べる場合には「あえて同じ言葉」のように，意図があって同じ言葉を使用している場合であった。このように「繰り返す」では反復される文言が同じ用例が多いのに対し，「重ねる」では主に同じ機能や役割を持つ発話を，文言を変えて反復することによって，より効果を増そうとする場合に使用されると考えられる。

しかし抽象名詞には「過ち（悲劇，歴史）を（は）繰り返す」などの例もあり，この場合には反復された具体的な内容が同じとは考えにくい。これらの場合は，前回起こったときの経験や教訓があるにも関わらず，同様のことがまた起こった，すなわち進歩がないということを強調し，むしろ前回起こったことと内容は変わっても，その結果は全く同じだということを述べる特別な意図がある場合と考えられる。この例で「重ねる」を用いると「繰り返す」の場合とは異なり同じことが起こるという意味ではなく，例えば「過ちを重ねる」は内容が同じかどうかはともかく「過ち」を反復することでさらに窮地に陥るような場合を表わすと考えられる。

5.3 「積む」と「重ねる」に共起する名詞

5.3.1 「経験」

「積む」「重ねる」と共起していた「経験」について以下の二点から検討する。

[3]「経験」の蓄積か，「経験」の反復による効果か

(a) 「あんな症状のときには，もっと慎重に診るべきなんだな」と医師は反省し，**経験**

を**積む**ことができます。（OB6X_00240）

(b) 先ほど言ったように，一度教師になってしまうとその塀の中で，いろいろ県の教育センターなんかに行って短期的な研修はしますけれども，やはり，よその飯を食ってくる，民間の社会の論理，動きというものを実体験として身につけてくる，**経験**を**積んで**くるということが余りにも機会としてできないんですね。（OM51_00003）

(c) 四十代，五十代と**経験**を**重ねて**，どんどん美しくなっていけたら，いいですね。（PM21_00722）

(d) そういう**経験**を**重ねる**うちに，人を怒らせる行動パターンを身につけてしまうようです。（PB23_00665）

[3](a)の「積む」では「反省して経験をする」のではなく「反省して（得た）経験を蓄積する」ことを意味し，(b)では教師にとって得難いが必要と思われる「よその飯を食ってくる」，「民間の論理や動きを実体験として身につけてくる」，「経験を積んでくる」ということを列挙しているのに対し，「重ねる」では(c)では年齢が進む間，(d)では経験を反復している間という限定された期間に，特に特定の経験ではなく（様々な）経験を経ていくことによって効果や影響が発生し，深化・進行する（「美しくなる」「行動パターンを身につける」）ことを述べていると考えられる。

[4]「経験」がプラス評価かマイナス評価か

(a) この点，まったくの素人であった私が大手会社で貴重な**経験**を**積めた**ことは，ラッキーというほかない。（LBi3_00008）

(b) 老人病院に行って耳をすますと、いたる所で、幼児語で話しかけておられるのが聞こえてきます。しかし、この老人たちは、社会でいろいろな**経験**を**積んだり**、苦労をされた方です。幼児とは違うはずです。（LBi3_00136）

(c) ・・・嫌悪的な環境から逃れることができないという**経験**を**重ねる**ことによって形成される無力感のことである。（PB31_00053）

(d) つまり類似した状況で成功**経験**を**重ねれば**期待は上昇し，失敗**経験**を**重ねれば**低下すると考えられます。（PB43_00430）

「積む」では[4](a)は「貴重な経験」のようにプラス評価の経験を述べている。また(b)は苦労を含めた様々な経験を蓄積した老人が価値ある存在であることを述べている。

一方で(c)(d)の「重ねる」の例では，内容は異なるが，それぞれ「嫌悪的な環境から逃れる」「成功」「失敗」という効果を持つ経験を複数回，経ることが述べられており，効果の方向性はプラス・マイナス両方と共起する。互換性をみると，「積む」の中心義と異なるマイナス評価の蓄積を表わす(c)の用例，および(d)の「成功経験」より「失敗経験」のほうが「積む」への互換性が低いと言うことができる。

5.4 三動詞と共起する名詞—「練習」

最後に，唯一三動詞と共起していた「練習」について検討する。

[5]「練習」で行われる内容

(a)1. 前方右角Ａを支点にして，右手で手前Ｂをつまんで折り返す**練習**を**繰り返す**。（LBg7_00015）

(b) リスニングの**練習**を何度**繰り返しても**上手に英語が聞き取れないのは・・・。（OC01_07754）

(c) ・・・ポーズがとれないからといって，自分は力不足だなどとは思わないでください。体全体に意識を行きわたらせながら，徐々に**練習**を**積んで**いきましょう。（LBs4_00012）

(d) ３年生がリーダーとなり，１週間をかけて**練習**を**積み**，体育祭の色に別れ，その成果を全校生徒の前で発表します。
（OP82_00001）

(e) ・・・教えられても，先輩の姿を見ても，イメージすらつかめない。ひたすら**練習**を**重ねて**手探りし，少しでもいい感触を得てはそれを忘れないよう・・・（PM31_00197）

(f) ラムといえば，日の出から日没まで**練習**を**重ねる**ことで有名な男。（LBi7_00033）

「練習」は三動詞と共起可能であるが，「繰り返す」の[5](a)では「つまんで折り返す」という具体的な同じ動きを反復することを，(b)はある動作を反復しても効果がないことを表わしている。また「積む」の(c)は練習を反復・継続し少しずつ成果を蓄積させていくことを，(d)は一定の時間を費やして蓄積したものを一つの成果として発表することを述べている。「重ねる」は(e)はイメージをつかもうと練習を反復しながら良い効果（「いい感触」）を模索し，効果があった場合にさらにその効果を深化させていくことを述べ，(f)は特定の時間内に練習の反復を継続することを述べている。

このように同じ名詞が複数の動詞と共起するような場合にも，動詞が持つ中心義と連続した機能動詞の意味は共有されており，各動詞の互換性は，この動詞特有の意味が言語化され明示的な場合や強調する修飾語などがある場合には，他の動詞との互換性が低くなり，また互換性がある場合でも，その機能動詞特有の意味によって，聞き手に与える効果や聞き手が推測する話し手の発話意図などが，解釈し直される場合も多いと考えられる。

6. 三動詞の異同まとめ

以上のことから，三動詞の中心義，および，三動詞がそれぞれの抽象名詞や動作名詞と共起した場合に有する中心義と連続した意味を表６に示す。表中，上段の□内左側（具体名詞の列）が各動詞の中心義を表わし，右側（抽象名詞，動作名詞の列）が，中心義が抽象名詞や動作名詞の意味にどのように共有されているかを表わす。なお「繰り返す」は機能動詞としての意味しか持たないため，これを中心義と考え３列同じ意味を示す。またそれぞれの動詞の下段には，共起する名詞の例を示す。

7. 日本語教育への応用

7.1 中心義の導入

以下，これらの結果を日本語教育に応用する試案を述べる。本稿で取り上げた動詞は，旧日本語能力試験の出題基準ではすべて２級レベルであり，特にこれらの語の機能動詞としての意味に注目する場合は中級後半以降での導入になると考えられる。またここで提案する実質動詞の意味から中心義を分析し機能動詞の意味を導入していくという方法は，他の機能動詞の場合にも応用可能と考える

まずこれらの動詞を学習者に導入する際は，基本的に①動詞の中心義の確認，②中心義と連続する機能動詞の意味の理解といった順で行い，中心義や機能動詞の意味の連続性は，可能な限り学習者自身が考え実感できることが望ましいと考える。導入例としては，[1] [2]のような例を考える。

[1]「積む」導入例
(a) **ブロック**を**積んで**，壁を作る。
(b) 机に読まない**本**を**積んで**おく。

[2]「重ねる」導入例
(a) **シャツ**に**カーディガン**を**重ねる**。
(b) **口紅**に**グロス**を**重ねる**。

表6 三動詞の異同まとめ

	中心義	抽象名詞	動作名詞
繰り返す	同じ内容の動作を反復し，その動作の効果や影響は不問，もしくは効果や影響がない		
	（具体名詞との共起はなし）	①内容：言葉，パターン ②内容の評価：過ち，悲劇	①目的達成のための調査や言語活動：実験，テスト，主張 ②戦いや攻撃的な動作：衝突，抗争，攻撃 ③抽象的な動き：動作，作業，操作 ④自動詞や他動詞の無意志動詞で変化を表わす：呼吸，分裂，再発 ⑤反意の二動作・変化・一連のサイクル：入退院，増減，循環 ⑥動作の結果の評価：失敗．試行錯誤
積む	重量ある同種の二つ以上のものを物理的に上方向に置く	動作主に負担になる動作を反復し，動作の反復の結果として倫理的・能力的にプラス評価の内容が蓄積	
	煉瓦，石垣，ブロック	キャリア，徳，善行，実績	修行，トレーニング，訓練
重ねる	同じ役割・機能のもの（同種・異種，数量不問）を一定方向に反復して接触，密着させる	同じ機能・役割，および反復による効果・影響を持つ内容・動作を反復し，動作の反復による効果・影響の方向性は一定方向だが不問。いずれかの目的・方向に向かって一定方向に深化・進行させる	
	皿，子音，まつ毛にマスカラ，シャツにカーディガン，アイコンにポインタ	①時間の経過：年齢／年月 ②数の増加：版／回 ③イメージの同時想起：（○に）自分 ④音声同時再生：（○に）合成音 ⑤情報の照合：個別情報 ⑥場所（焦点）一致：（○に）目線	①動作主の姿勢や心情：努力，苦労，我慢 ②反復によりプラス方向に向かう行為：検討，練習，改良 ③反復によりマイナス方向に進む行為：借金，失敗，犯行 （②には言語活動「議論，協議」や快楽的行為「デート，逢瀬」なども含まれる）

すなわち導入の際は「机の上に書類を積む／重ねる」のような差異を理解しにくい例は避け，中心義の差異が明確に現われる例，例えば「重ねる」であれば，異種のものを物理的に上方向以外で接触・密着させる [2] のような例を挙げることが大切と考える。

さらに [3] のように両動詞に共起可能な名詞をあげ，使用可能・不可能な文脈を挙げて，使用可能な文脈には中心義が含まれていることを確認する。

[3] (a) 机の上に書類を**○積む/ ○重ねる**
書類を**×積んで／○重ねて**束にする。
(b) 毛布を　○積む　/　○重ねる
部屋の隅に毛布を**○積んで／○重ねて**置いておく。
冬になると，毛布を**×積んで／○重ねて**寝ている。

[3] のように名詞と動詞だけの組み合わせなら互換可能な場合でも，文脈によって使えない例があることを示すことで，中心義の意味を際立たせることが可能と考える。言い換えれば，名詞と動詞の組み合わせの提示にとどまるのではなく，その名詞がその文脈で共起可能な理由，すなわち名詞の持つ特徴（重量，機能・役割など）に注目させること，さらに互換性についても中心義が大きな役割を果たすことを確認することが重要と考える。

7.2 機能動詞の意味—中心義からの連続性

中心義の確認後，動作名詞と共起する機能

動詞の意味の理解に進む。学習者自身が機能動詞の意味や中心義との連続性について考えるためには，中心義を再確認し，どのような動作名詞が共起可能かを考えさせる演繹的な方法と，共起可能な動作名詞を挙げ，中心義が機能動詞の意味とどのように連続しているかを考えさせる帰納的な方法があり得る。

例えば「積む」について帰納的な方法で考える場合，中心義の「二つ以上の同種の重量があるものを置く」から連想しやすい動作名詞「トレーニング，修行」などを提示し，機能動詞では「動作主に負担になる動作の反復」となっていること，そこから「研鑽，修養」といったより抽象的な動作名詞にまで理解を広げ，それらを通じてすべて中心義の「物理的に上方向に置く」が「倫理的・能力的にプラス評価のものを蓄積」という意味に連続していることに気づかせる。また抽象名詞は，「キャリア，徳，実績」などを挙げ，動作名詞が反復による蓄積の過程であるのに対し，抽象名詞は，反復の結果として蓄積されるものという連続性にも気づかせたい。

また「重ねる」では「努力，苦労」などの例を挙げ，中心義の「反復して接着・密着させること」が「（途切れずに）反復する」という意味につながることに気づかせる。その際，中心義の「一定方向だが方向性不問」が動作名詞においても「検討，工夫」のようなプラス，「借金，犯行」のようなマイナスの両方向に深化・進行が可能なことや，「積む」との対比で肉体的負担のない言語活動や知的活動，快楽的な活動なども含まれていることにも注目させる。さらに抽象名詞の場合にも，中心義の接触・密着から連想される，反復による年月の経過や数の増加，イメージの重なり，（時間的）同時発生，内容の重複などを確認し，反復や重複の発生以前より効果や影響が増すことを確認する。

最後に「繰り返す」は実質動詞の意味はない純粋な機能動詞であり，具体名詞との共起はないことをまず確認する。そして反意の二つの動作・変化やサイクルを成す動作「増減，循環」，および自動詞や他動詞の無意志動詞の動作名詞「呼吸，分裂」など，単純に同じ動きや変化が反復されるのを描写する名詞を挙げ，これらの名詞では主に反復後の効果や影響が不問，もしくはないことを表わすことを述べ，そのため効果や影響に変化がある「重ねる」や結果が蓄積される「積む」とは互換性が低いことを確認する。余裕があれば，「過ち（過去，歴史）は繰り返す」などの例の意味も考えさせたい。さらに抽象的な動き「作業，操作」や，（目的達成のための）調査や言語活動「実験，主張」，戦いや攻撃的動作「衝突，抗争」などの例を挙げ，これらも具体的な動作の内容であり，同じ動作の内容が反復されていることを確認する。

このように共起する名詞の特徴や中心義と機能動詞の意味の連続性を考えることで，学習者に類義の機能動詞の異同をわかりやすく導入することが可能と考えられ，他の機能動詞にも十分応用可能であると考える。類義語は無数にあり，学習者が疑問を持ったときに，学習者自身で中心義や多義語の意味の連続性について考え，分析できることが理想である。最終的にはそのような姿勢や分析の視点，具体的な方法を身につけられるよう，まず上記のような考える手順を練習できる導入方法を工夫すると良いのではないかと考える。

8. おわりに

以上，「繰り返す」「積む」「重ねる」の異同，およびその日本語教育への応用について検討してきた。本稿では各動詞の中心義を特定し，その中心義と機能動詞の意味との連続性を検討してきたが，この妥当性について意義の分割の基準を厳格化し，多義ネットワークを明確化することなどで検証することが今後の課題と考えられる。また今回は BCCWJ

を利用して分析を行ったが，さらに他のコーパスでも同様の結果が得られるかの検証も必要と考えられる。また本稿では三語のみを検討したが，これらの複合語である「積み重ねる」「積み上げる」などとの関係，さらに他の類義の機能動詞の異同についても今後検討していきたい。

（留学生センター　准教授）
（大分大学国際教育研究センター　准教授）
（大分大学国際教育研究センター　講師）

【謝辞】

本研究は科研費（基盤研究（C)25370591 ），および（基盤研究（C)26370609 ）の助成を受けたものである。

本稿は，第 10 回国際日本語教育・日本シンポジウム（於香港大学専業進修学院）にて口頭発表した内容を再考，修正しまとめたものです。貴重なコメントをくださったフロアの皆様に感謝いたします。

【参考文献】

石川慎一郎,2008,『英語コーパスと言語教育』，大修館書店

国立国語研究所,1972,『動詞の意味・用法の記述的研究』，秀英出版

――――――――,2011,『日本語書き言葉均衡コーパス』検索アプリケーション「中納言」,https://chunagon.ninjal.ac.jp/search

白石知代・松田文子，2014,「多義動詞『ぬく』のコアとそれを用いた複合動詞『V-ぬすく』の意味記述―L2学習者の意味推測を支援するために―」，『日本語教育』,159号，1-16

砂川有里子,2014,「コーパスを活用した日本語教師のための類誌表現調査法」『日本語／日本語教育研究』5 号

瀬戸賢一,2005,『よくわかる比喩―ことばの根っこをもっと知ろう』，研究社

――――編,2007,『英語多義ネットワーク辞典』小学館

長嶋善郎,1979,「ツム・カサネル・ツミカサネル」，柴田武他（1979）『ことばの意味２』平凡社選書，172-180

中溝朋子・坂井美恵子・金森由美，「コーパスを利用した反復相・反復強意相の機能動詞の異同 - 「繰り返す」「積む」「重ねる」と名詞の共起状況を手掛かりに - 」『第10回国際日本語教育・日本シンポジウム（香港大学専業進修学院）』USB 版

プラシャント・パルデシ（編）（2014）『基本動詞ハンドブック』
http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/

松田文子，2001,「コア図式を用いた複合動詞後項「～こむ」の認知意味論的説明」，『日本語教育』,111号，16-25

松村明,2014,『デジタル大辞泉』小学館
http://dictionary.goo.ne.jp/jn，（2015年１月13日）

村木新次郎,1991,『日本語動詞の諸相』ひつじ書房

森山新（編著）,2012,『日本語多義語学習辞典（動詞編）』，アルク

【注】

(1) 村木（1991）では反復相としてはこの二動詞を，反復強意相としては「積む」のほか「練る」「繰り広げる」「勧める」「募らせる」を挙げている。

(2) 瀬戸（2005，2007）では「多義語の複数の意義」のようにいわゆる辞書の項目の記述などで一般的に意味と呼ばれるものを「意義」と呼んでいる。本稿ではこれらを「意味」と呼ぶ。

(3) こうした語の中心義と多義ネットワークを日本語教育，特に動詞に応用した例には，森山（2012），プラシャント（2014）

などがある。

(4) 石川（2008）は（共起強度を考える際に）共起頻度だけでは中心語と共起語自体の頻度によって値が大きく左右されると述べ，また共起強度を示す指標には高頻度のコロケーションの評価に強い頻度型指標（Ｔスコア，対数尤度比）や低頻度でも特徴的なコロケーションを検出する非頻度型指標（相互情報量）があるが，ダイス係数はその中間型であるとしている。こうした理由から本稿ではダイス係数を主とする指標として採用した。

(5) コーパスの用例の中には例えば「盃を重ねる」のように同じ表現で慣用的意味と本来の意味（例：物理的に盃を積み上げる場合）の両方が含まれる可能性はあるが，このような場合，本稿ではすべて分析の対象から除外する。

(6) 表中の「一進一退」「自問自答」「試行錯誤」は，「中納言」による検索結果では「一退」「自答」「錯誤」として検索された。ただ，実際にはすべて四字熟語の用例であったため，表中，および以下，便宜上，四字熟語で示す。

(7) 「積む」と共起する動作名詞には「一度経験を積めば」のように１回の動作でも共起可能な場合もある。

(8) このような「版」などを接尾辞と分類する考え方もあるが，本稿では語の品詞分類は， BCCWJ の分類に従う。